

山田美妙・内田不知庵往復書簡紹介および

「内田魯庵著述年譜」未紹介小説「もみぢ狩」について

福井辰彦

大貫俊彦

はじめに

立命館大学図書館には、自筆稿本・書簡・旧蔵書などの山田美妙関係資料が多数所蔵されている。これらは、美妙の長男旭彦が昭和九年（一九三四）四月十八日、三十八歳で亡くなった際、立命館大学に引き取られたものであり、『美妙選集』（立命館出版部、昭和十年）や、塩田良平『山田美妙研究』（人文書院、昭和十三年）に利用された。その後、十分な整理もなされぬまま、書庫に眠っていたが、二〇〇六年以降、白楊荘文庫研究会およびその後を承けた立命館明治文学研究会によって、順次整理・調査が進められている。

なかでも、諸家から美妙に宛てた書簡約一七〇通は、美妙研究のみならず、同時代の文学者・出版人の動静・交遊を知るうえで重要な資料であり、翻刻・研究の進捗とともに、新たな知見が

得られつつある¹⁾。

こうした研究活動の中で、二〇一〇年に立命館大学図書館が新たに購入した内田不知庵宛て美妙書簡二通のうち一通が、同館に以前より所蔵されていた美妙宛て不知庵書簡と対の関係にあることが判明した。互いに取り交わされたまま散逸していた二つの書簡が、一・二〇年余の時間を経て出会うとは、まさに奇遇といえる。しかし、この邂逅は、さらに重要な発見をもたらすこととなった。

明治二十年代に評論や翻訳で活躍した不知庵の小説として現在知られているものは、「酒鬼」と「当世文学通」の二作品であり、野村喬氏が編纂した「内田魯庵著述年譜」（『内田魯庵全集』別巻、ゆまに書房、一九八七）でも初期小説としてこの二作品を取り上げている。しかし、この往復書簡には、これら二作品以外の不知庵の小説に関する記述が存在した。そして、この記述を手掛かりに調査を進めた結果、新たに発見されたのが小説「もみぢ

狩」である。

以下本稿では、美妙と不知庵の間に交わされた往復書簡と小説「もみぢ狩」を紹介し、同作を不知庵の執筆活動のなかでどのように位置づけるべきか若干の考察を加える。

一、立命館大学所蔵「内田不知庵—山田美妙—

往復書簡について

まずは、美妙と不知庵との間で交わされた往復書簡を翻刻、紹介することからはじめる。往信に当たるのは、新たに立命館大学図書館が購入した明治二十二年（一八八九）八月十九日付不知庵宛て美妙書簡（以下書簡アとする）であるが、実はこれにはもう一通、別の書簡（以下書簡イとする）が同封されている。書簡アに対する返信が、同館に以前より所蔵されていた明治二十二年八月二十二日付美妙宛て不知庵書簡（以下書簡ウとする）である。では、書簡アから順に見てゆこう。

●書簡ア（資料番号RTYB00192）

封書 巻紙一枚 墨書

〔封筒表〕 駿河国駿東郡須走村ふじや方 内田貢様貴酬

〔封筒裏〕 八月十九 東、神、平永町 山田武

〔消印〕 武蔵 東京神田 廿二年八月 十九日 又便／駿河 須

走 廿二年八月 二十日 口便

俄の御出立御名残をしう存じます
須走村ではまことに富士の裾野、
「境寂人見神」の云語も思ひ出さ
れて御浦山しいです。

風情と風姿の御論文また民友社

に御差出しになつた趣、人から聞きま

した。時節がら異論を排斥するに

は屈竟の題目、折角これをば御

鍛錬あるやう望まれます。

おもかけは其實二三人の合作との趣、

…まづ第一評をいらつめ第廿六号

へ出してみました。御覧下さい。

「ゾーラ」が此頃裸体美に就いて仏

国の多数と筆戦の最中、外出し

た折、「ゾーラ」を短銃で狙撃したのも

が有つたとの趣が近着のパンチに出て

居ました。滑稽雑誌の事ゆゑ真か

偽かわかりませんが、もし真ならば仏

国の文学界も中々すさまじいもので

す。

京都本願寺から三宅の処へ切手手紙

が来ました。御都合もありまじやうが、

二三号で終つても宜しいです、先方

でも待つて居ますから、維御筆勞

願ひます。別紙書状にある「十枚」

は十行廿字の十三四枚の意味です。

御如才もありますまいが、御草稿は御

出来になり次第私まで御差送り

願ひます。

右御返事かた〜

八月十九日

武

不知庵さま

悟下

宛先は「駿河国駿東郡須走村ふじや方」となっている。これは、不知庵が避暑のため滞在していた旅館である。このふじや滞在については、「二葉亭余談」(「きのふけふ」、博文館、大正五年(一九一六)三月)に次のような回想がある。

余が小説に由て初めて甚深な感動を与へられ、一種の敬虔な信念を抱くやうになつたはドストエフスキーの「罪と罰」であつた。此の「罪と罰」を読んだは明治二十二年の夏、恰も富士の麓に暑を避けてゐた時で、客舎に俺留する三ヶ月間、

再三再四反復して初めて露国小説の偉大なるを感嘆した。

そして「夫れ以来、余の小説に対する考は全く一変して了つた。夫までは文学を軽視し、内心は「時間潰し」に過ぎない遊戯と思ひつ、も面白半分の応援隊となつてゐたが、夫れ以来此の如き態度は厳肅な文学に対する罪悪であると思ひ、同時に余の如き貧しい思想と稀薄な信念のものが遊戯的に文学を語るを空恐ろしく思つた」と述べている。すなわち、書簡アを受け取つた不知庵はこの宿で、彼の文学観を大きく変化させる体験をしているのである。このことについては第四章で改めて考察する。

三段に分けられた書簡の第一段に見える「風情と風姿の御論文」は、『国民之友』第五十五号(明治二十二年七月二日)掲載の不知庵主人「詩文の感応」のこと。「いらつめ第廿六号」の「第一評」は、『いらつめ』第二十六号(明治二十二年八月十五日)掲載の「国民の友のおもかげ」を指す。

重要なものは第三段である。ここでは、「京都の本願寺」から「三宅」に届いた手紙を受け、美妙が不知庵に原稿執筆の依頼をしている。「三宅」とは、おそらく金港堂編集局で美妙と同僚の関係にあつた三宅米吉のことと思われるが、「京都の本願寺」との関係や依頼された原稿の内容などについては、この書簡からだけではよく分からない。詳細は、文中「別紙書状」と触れられている、書簡アに同封された書簡イによつて明らかとなる。

次に書簡イを翻刻するが、この書簡には句読点が付されていない

いため、文の切れ目に一字分の空白を入れる。

●書簡イ（資料番号同前）

便箋（四周双辺、有界二十行、青色刷）一枚 墨書

拝啓

此度は種々御厚情社員一同深く

奉謝候 然は不知庵先生には御起稿御承

諾被下候よし一同も喜居候 兼而御話し申

上候よふ仏教を主義として學術

徳操両有之女子を作る目的にて候ま、

別に存意も無之候へども誰れが見ても

今日の女子は斯よふにあろふ今日の婦

人は斯あり度ものとの感を看客に

与度先は右様の主意のみなり 又兩

月に十枚位づ、御寄送被成下度よふ願上候

発行は明月二十日比と内決致候得ども

石版画の挿度（挿）に付可成は少々早目に

御寄送被下度願上候 終に願上候は何分

素人のみにて御座候ま、以後ども御尽

力被成下度願上候 草々

（婦人の世界）と名付け候

十日

鎗八

三宅先生

机下

この書簡によれば、まず「仏教を主義とし」た女子教育雑誌『婦人の世界』が、明治二十二年九月二十日頃創刊予定であったことが分かる。同誌は「三宅先生」（書簡アに見えた「三宅」であろう）を介して不知庵に、「兩月に十枚位づ、」の原稿を依頼しており、不知庵はこれを承諾した。「石版画の挿度」とある「度」字は誤記かと思われるが、いずれにせよ石版画の挿絵が入る予定であったというのだから、依頼原稿は小説であったらう。

もう一通、書簡アを受け取った不知庵が美妙に送った返信にあたるのが、書簡ウである。

●書簡ウ（資料番号RTYB00024）

はがき 墨書

〔はがき表〕東京神田平永町九番地 山田武太郎様／するが 不

知庵

〔消印〕駿河 須走 廿二年八月 二十二日 イ便／武藏 東京

廿二年八月 二十二日 ヲ便

御申越の旨承諾仕り候

十枚位ならば それに來

二十日はつ兌との事なれば

寄送仕るべく候也

一週間には御手許へ

御返事まで あらく

美妙からの依頼を受け、不知庵が執筆を快諾している内容である。はがきの文面に「十枚位ならば それに來二十日はつ兌との事なれば」とあって、書簡イが確かに同封されていたことが分かる。

この往復書簡が交わされた明治二十二年、「都の花」発刊に際し、中根淑を名義上の主幹として、実際は美妙が主筆に拔擢されてから、美妙の声価は一段高まつていたのであり、彼は当代一の流行作家であった。一方不知庵は、年齢こそ美妙と同じであったが、前年の十月、他ならぬ美妙の小説集『夏木立』（第一編、金港堂、明治二十一年八月）に対する批評「山田美妙大人の小説」で文壇に登場して以降、『女学雑誌』を舞台に次々と批評を發表する、いわば売り出し中の身であった。小説執筆の依頼が不知庵本人にはなく、美妙や三宅を介してなされていることや、美妙が書簡アで「御草稿は御出来になり次第私まで御差送り願ひます」と注意していることには、こうした小説家としての美妙と不知庵の実績の違いが反映しているであろう。

二、令徳会「婦人世界」と小説「もみぢ狩」

前章で翻刻・紹介した美妙・不知庵往復書簡によって、雑誌『婦人の世界』を発行しようとしていた「京都の本願寺」から、美妙および三宅米吉を介して、不知庵に小説の執筆依頼がなされ、不知庵がそれを承諾した、という経緯が明らかとなった。

続いて、本章では雑誌『婦人の世界』（発行時の名称は「婦人世界」と、同誌に掲載された不知庵の小説がどのような雑誌および小説であったのか、紹介する。

まず、明治二十二年八月十日付『京都日報』掲載の出版広告によって同誌の概略を知ることができる。

○婦人の世界 今回本派本願寺大学林教授中川太郎宮島鎗八田辺正直の三氏が發起人と為り冒頭の如き女学雑誌を發兌するとの事なるが其目的ハ學術は暫く置かも兎角生意氣が先に立ち敗徳者の最多き当今の女生を矯正し學術と淑徳と俱に完全の婦女を作るに有りと

『婦人の世界』は浄土真宗本願寺派（西本願寺派）大学林が中心となって発行した女子教育雑誌であり、書簡アに見える「京都の本願寺」とは、このことを指していたことが分かる。また、書簡イの差出人「鎗八」は、發起人の一人宮島鎗八と見て間違いあ

るまい。宮島鎗八については、浄土真宗本願寺派大学林関係資料にもその名を確認できる。すなわち、「学林江被仰出申渡帳」〔龍谷大学三百五十年史〕史料編第四卷、龍谷大学、一九九二〕によれば、当時、宮島は「文学寮画学教授」であつたことが分かる。また、宮島には『透視画法』（三田印刷所、明治十九年四月）の著書もあり、その例言によれば、千葉師範学校、同女子師範学校、同中学校で教鞭を執つていたこともあるようだ。

また、同じく西本願寺派大学林有志が結成した反省会の機関誌『反省会雑誌』第二十二号（明治二十二年九月十日）に掲載された広告「婦人の世界 発行の主意」には次のようにある。

このたびわれ／＼有志の者相かたらひ、令徳会なるものを設け、毎月一回「婦人の世界」てふ女学雑誌を発行すること、せり、此雑誌は世の姉妹のため、有益なる事柄をしるし、阿母、妻君、令嬢方の、よく其子弟を養育し又其良人を助けて家内を立派に治め得るやうに導くものにして、つまり婦女子の淑徳を養ひ、其本分を全ふせしめん事を目的とす

ここに見える令徳会を発行元として、当初、『婦人の世界』と名づけられるはずだったこの雑誌は、実際には『婦人世界』の名で、明治二十二年十月一日、第一号が発行された（書簡イの時点では、発行は九月「二十日比」の予定とあったが、広告には「発兌定日」毎月一日」とあり、おそらく編集段階で変更になつ

たのだろう）。そして現在、この『婦人世界』は、明治新聞雑誌文庫に、第一号から第十五号（明治二十三年十二月二十日発行）までが所蔵されている。

書簡イには「仏教を主義」とする女子教育雑誌を目指すが述べられていたが、第一号の社説「婦人の世界何の爲に出る」は、次のように主張する。

要するに我国今日の女子教育は、多くは物質教育に流れ、文学、芸術、交際、音楽に長ずれば、直に以て泰西婦人たらしめんとするの傾向あるが如し、斯の如きは奮に婦人真個の教育法たらざる而已ならず、又大に弊害あらんとす。（中略）果して然らば吾等は如何なる手段もて、之をして、純潔なる空気の中に呼吸せしめ、灼々たる天日の下に棲息せしめんとするか。他なし、只漸次に、我国固有の美德は、愈之を進め兼て欧米の長所を取り、以て永遠に之が基礎を設け之をして、俊秀、智慧、懿徳、高尚なる婦人の住処たらしめんとす。

ここには、国粹主義的な思想があらわであり、例えば「女学雑誌」のように西洋化を促す婦人雑誌とは一線を画そうとしている。先に挙げた「婦人の世界 発行の主意」には、「賛成を辱し寄稿を約せられたる」人々の名が挙がっているが、その中に志賀重昂、杉浦重剛をはじめとする政教社の面々が多数名を連ねて

いることも、この雑誌の性格を物語っている。なお、この賛同者の中には不知庵の本来「内田貢」や、「三宅米吉」の名があり、書簡ア・イの「三宅」が「三宅米吉」を指していることが確かめられる。

不知庵が執筆した小説は、「もみぢ狩」と題され、創刊号（前掲）から第四号（明治二十三年一月五日）まで掲載された。全四回で完結。第一回が創刊号に掲載されていることから、ほぼ約束通り原稿は美妙の許に届いたものと推測できる。ここで不知庵が用いた署名は「藤庵主人」であり、「酒鬼」や「当世文学通」と共通である。挿絵は三葉あり、落款は第一回、第二回が「芳洲」（井上芳洲⁸）、第四回は「国春」（歌川国春）とある。書簡イによれば、当初は石版画の予定だったが、すべて木版で刷られている。

「もみぢ狩」の梗概は以下の通りである。

雪の降る夜、向島の堤を粹人氣取りの美濃田風醒と法律家の村林宮人が一軒の家に向かつて歩いている。寒さに我慢できない宮人は風醒を急かすが、風醒は雪景色を賞美してなかなか歩を進めない。その時、二人はふいに隅田川へ何かが落ちた物音と飛び込みらしいという噂を耳にする。その噂を気にしながらも、彼らは清見武文の家へ向かう（第一回）。家に着いたが、主人は雪見の散歩で留守。主の帰宅を待つ間に、近所に美人だが祖母と共謀しては男を騙して金を奪い取

る娘がいて、最近、騙されて自殺した男の幽霊に悩まされている、という噂を聞く。悩まされる良心があれば救いたいと思う宮人。そこへ主人が帰宅、飛び込んだのは例の娘で今助けてきたところだ、と言う（第二回）。翌日、近所の娘お妙を見舞いに行く三人。臥せている美しいお妙を目にして、宮人は夢中、風醒は及び腰、清見は冷静に振る舞う姿勢をみせる（第三回）。見舞い以来、美しいお妙が暇に焼き付き、心が落ち着かない宮人。風醒が遊びにきてそれに気づき、宮人を冷やかす。宮人は風醒のことを煩わしく思うが、二人は連れだって春めく上野を散歩する。すると、四五日前まで臥せていたはずのお妙が、男らと酩酊して歩いている。宮人は自分が浮かれていたことを悟る。お妙らは二人の目の前で、スリの容疑で逮捕され連行されてゆく（第四回）。

また、参考図版として「もみぢ狩」の冒頭と第一回の挿画を掲載する。

小説 もみぢ狩

京都 藤 鹿 主人

第一回

是る人の子雪の降る夜に
隅田川の入り水

鷗毛を樂しむ詩人でも、重の薄衣では若何も浮念まじ。四疊半に置婦徳寄錦、をチヤ／＼とさせれば、雪は巴と瓜彈の異徳遊る面白かつふが吹雪降込むわばり家に灰圍一ツの工面も出来ぬ貧乏人では仙臺節も口には出まじ。イれでも家があれはまぼしる窟一枚で世を渡る商賈では大にも増した苦みは安達豚の機織がござりしや、たぞ罵るべし。されは歌は袖にありて人にあり、人にありて境邊にあり。嗚呼、經景——春絶と賞めた時は好かりふが風雪に閉ぢりれて凍死をする間際には彌勤の世までも



三、小説「もみぢ狩」の検討

——謡曲「紅葉狩」との関係を中心に

ここまで美妙と不知庵の間で交わされた書簡と小説「もみぢ狩」を紹介してきた。本章では、初期小説に関する先行研究を参

考にしながら作品としての「もみぢ狩」について検討を加える。

まず一読して明らかなのは、この小説にはこれまで先行研究が指摘してきた不知庵の初期小説の特徴がよく表れているということである。たとえば軽妙な文章で書かれた冒頭の一節は、初期小説の表現の特徴として「もっぱら八文字屋本風の、さらに笹村の『むら竹』ふうの文体で書かれている」と野村喬氏が指摘するように、近世文学の影響が顕著である。紙幅の関係上、詳細な検討は別稿に譲らざるを得ないが、本稿では主に不知庵が小説を執筆する際に用いた手法から、「もみぢ狩」の表題や物語内容に込められた主要なモチーフについて考察する。

いま簡単に「もみぢ狩」における初期小説との表現の共通性について触れたが、その他に野村氏の特徴として挙げるのが、「小説『酒鬼』はデイッケンズの翻案、「当世作者懺悔」はアーヴィンキングの翻案であり、「読小説法」はブライントンの翻訳であり、「当世文学通」も出所は定かではないが、翻案だったと考えられる」という「翻案」の手法である。もちろん、それぞれの作品を十把一絡げにしてしまうことには注意が必要だが、本作「もみぢ狩」に関しては、かなり明瞭に看取することができる。それは、「もみぢ狩」という表題

にも示唆されているように、謡曲、特に「紅葉狩」の影響が顕著であるということだ。

「もみぢ狩」には、不知庵の書いたこの頃の評論、小説などは珍しく、謡曲に関する引用が際立っている。例えば冒頭部、向島の雪景色も、あばら家暮らしの貧乏人には楽しめぬ、「それでも家があればまだしも薦」一枚で世を渡る商売では犬にも増した苦みは安達原の姨様がござらッしやッたと罵るべし」と語る文章に見える。「安達原の姨様」とは、「黒塚」に登場するあばら屋に住む老婆（シテ）の境遇を踏まえた表現だろう。ここではそれが部分的な引用に過ぎないとしても、謡曲の引用はこれにとどまらない。

「一向に奇絶でないで、寒くて腹は減るし……時に落付く家はまだ遠いのカ子」廻合羽の男は返事もなく立止て仔細ありげに眺め口の中で——どうも奇絶——頓て小声で高慢の謡曲、流義は観世と宝生を学んで更に一派を出したと当人の咄。「改行」「それ雪は鶴毛に似て飛んで散乱し人は鶴鑿を着て立て徘徊すと云へりされば今降る雪も本見し雪にかわらねと我は鶴鑿を着て立て徘徊すべき袂もくちて袖せまき細布衣陸奥のけふの寒さをいかにせむ……」

（藤庵主人「もみぢ狩」（第一回）『婦人世界』第一号、明治二十二年十月一日）

隅田川に沿って向島の堤を雪のなか歩いて行く美濃田風醒が、おもむろに謡を口ずさむ場面であるが、ここで選ばれているのが謡曲「鉢木」の一節である。本文では「流義は観世と宝生を学んで更に一派を出した」とあるが、右に当該部分を引用してみる。

シテ ああ降つたる雪かな、いかに世にある人の面白う候ふらん、それ雪は鷺毛に似て飛んで散乱し、人は鶴鑿を被て立つて徘徊すと言へり、されば今降る雪も、もと見し雪に変はらねども、われは鶴鑿を被て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖狭き、細布衣陸奥の、けふの寒さをいかにせん

（鉢木）（謡曲集 下）日本古典文学大系41、岩波書店、一九六三、四〇八頁。傍線は引用者による。以下同じ。）

風醒が謡う謡曲「鉢木」のこの一節は曲の冒頭近く、大雪のなかを家へと向かう佐野常世（シテ）が雪景色を眺めつつ『和漢朗詠集』の白楽天の詩句を思い出しながらも、落魄した今の境遇を嘆く台詞である。

このように小説「もみぢ狩」においては謡曲の引用が所々にちりばめられているのだが、なかでも物語内容を支える主要なモチーフとして援用されているのが、先にも述べた「紅葉狩」である。「紅葉狩」は観世信光の作、「平維茂が戸隠山に狩猟に出かけて、紅葉狩の酒宴を催してゐる女に誘惑されると、その女は鬼女の本体を現はして維茂を捕らうとしたが、維茂は神に助けられ

て、遂に鬼女を平らげる」というのが粗筋だ。小説「もみち狩」は、この筋立てを借りて、物語の舞台を現代に移し替えている。人物配置は、祖母と騙つては金持ちの男をたぶらかすお妙が鬼女（シテ）、お妙の美しさに自分を見失いそうになる宮人が平維茂（ワキ）に対応する。本文中で宮人がお妙に惚れ込んでしまう場面を具体的に見てみよう。

よしや鬼であらふと蛇であらふと、此鬼なら喰はれもしやふ此蛇なら吞まれもしやふ、人を取る茸は色美はしく河豚の腹は奇麗なものと心学の極粋を細末にして吞込み、高が皮一枚と悟道を開いた男でも是を見ては恋の初峯入、成程色はこんなものかと人情のそもゝを味つて……さて休められぬも此道か 常から磊落を粧つて世間の女を枯木寒巖と振向もせぬ宮人も此生菩薩を拝んでは矢も楯もたまらず、人前をつくろつて思はぬ苦笑ひをするまでもなく同伴の風醒に背中叩かれて後先揃はぬ返事……

（藤庵主人「もみち狩」（第三回）「婦人世界」第三号、明治二十二年十二月五日）

前章の梗概でも記したように、最後に宮人はお妙に対する恋の迷いから覚めるのであるが、その時に宮人と風醒の目の前に現れた清見武文が謡曲「紅葉狩」の一節を口ずさむ。こちらも小説と謡曲を並べて引いてみる。

風醒も宮人もあきれて詞もなく悄然と進む時耳に入るは中音の謡曲、「驚くまくらに雷火乱れ天地もひびきかぜをちこちのたつきも知らぬ山中におぼつかなしやおそろしや」二人は顔見合して苦笑ひ、フツト気が付けば謡ひし人は黒の羽織の紳士、同音にイヨこれはこれは……先夜は失礼。

（藤庵主人「もみち狩」（第四回・末尾）「婦人世界」第四号、明治二十三年一月一日）

ワキ あらあさましやわれながら、無明の酒の酔ひ心、まどろむ隙もなきうち、あらたなりける夢の告と 地 驚く
枕に雷火乱れ、天地も響き風遠近の、たつきも知らぬ山中
に、おぼつかなしや恐ろしや。

（「紅葉狩」（謡曲集 下）日本古典文学大系41、岩波書店、一九六三、一四八頁）

「紅葉狩」の曲のなかでは、ちょうど後場の初めに位置する。平維茂が紅葉狩を催している酒宴に誘われ、美女の盃と舞のうちに我を忘れ酔い伏してしまったが、夢に現れた男山八幡宮の末社神（間狂言）の神勅によつて我に返る場面である。清見の謡う「紅葉狩」が、恋の夢から覚めた宮人の心情と重ね合わされていることはやや指摘するまでもないだろう。

梗概にもあるように「もみち狩」に流れる時間は、冬景色の夜から春の息吹が兆し始めるまでの数日間であり、小説の表題は行

楽としての紅葉狩そのものを意味していない。季節とは関係のない「もみぢ狩」という表題に加え、本文に鏤められた謡曲の引用から考えても、不知庵が能の「紅葉狩」に着想を得ていることは明らかだ。また「紅葉狩」の鬼女（シテ）が、舞と酒宴によって維茂を手込めしようとしたものの、退治されてしまう点に注目するならば、「もみぢ狩」のお妙には、色気でたぶらかす妖艶な女性性と、最後には退治（逮捕）されてしまうという勧善懲悪のモチーフが、基調にあると指摘することができる。以上から、小説「もみぢ狩」が謡曲「紅葉狩」を翻案した小説であることは間違いない。

四、小説「もみぢ狩」の位置づけ

今回その存在が明らかになった「もみぢ狩」は、不知庵の初期小説のなかで「酒鬼」、「当世文学通」につづく第三番目の作品ということになる。そして、この発見のなかで幸運だったことは、往復書簡の復元によって、小説執筆の依頼と承諾までの経緯という、作品周辺の事情も一部明らかになったことだ。不知庵の小説に関しては、明治二十四年時点で奥泰資が「以前にも二三種書きしことハありとか」という発言をしており、これに従えば、不知庵が書いた小説の数はあまり多くはないようだ。そのような状況のなかで、執筆経緯をうかがわせる往復書簡と、小説が出てきた意義は大きい。では、新たに発見された「もみぢ狩」は、どのよ

うに位置づけることができるだろうか。

まずは、不知庵の小説が載った掲載誌および執筆経緯についてである。当時美妙が主筆を務めていた『都の花』に掲載した風刺小説「当世文学通」は異色であるとしても、巖本善治が主宰するキリスト教系の婦人雑誌『女学雑誌』には、同誌上で盛んに繰り広げられていた禁酒宣伝を多分に含んだ小説「酒鬼」を執筆し、そして本稿で紹介した『婦人世界』には勧善懲悪の筋書きを持った「紅葉狩」の翻案小説「もみぢ狩」を掲載している。この時期の小説を考える上で、女子教育雑誌の存在とその啓蒙性は重視されるべきだろう。また、これら三つの作品の執筆経緯には、美妙が少なからず関わっていることも注目に値する。『内田魯庵伝』のなかで野村喬氏は、『都の花』に書いた「当世文学通」と『女学雑誌』の「酒鬼」を美妙に「唆されて」書いたと推測している¹⁶が、『婦人世界』における「もみぢ狩」の執筆経緯からも、美妙が仲介となって不知庵に小説の執筆を依頼するという関係性を読み取ることができた。ここでの二人の関係性は先の野村氏の推論を傍証するものであろう。さらにもう一步踏み込んで考察するならば、この三つの小説のいずれもが柳田泉氏の言う「他動的」¹⁷に、つまり他者からの依頼によって書かれているということも分かる。これらは不知庵のこの時期の小説を考察するうえで重要な観点となるであろう。

ところで「もみぢ狩」は、先述したように、自らの小説観の一大転機となった須走村での『罪と罰』の読書体験と相前後する時

期に執筆、掲載されている。となれば「もみぢ符」が、この重大な体験とどのような関係にあるかということも明らかにする必要がある。

ここで再び先に紹介した美妙の書簡に戻ろう。

俄の御出立御名残をしう存じます

須走村ではまことに富士の裾野、

「境寂人見神」の云語も思ひ出さ

れて御浦山しいです。

これは書簡アの冒頭部分であるが、ここに「俄の御出立」とあることから、八月十九日の時点ではまだ不知庵が須走村に到着したばかりだということがわかる。

さらに、次のような回想もある。

其の年の夏になつて、私は富士の裾野へ転地した。其所で始めて『罪と罰』とを読んだのであるが、それも最初百ページばかり読むのには、面白くないので何でも半月ばかりもかゝつたが、それから後は僅かに三日で読み通して了つた。之れは『罪と罰』を読んだ経験のある何の人に聞いて見ても同じことである。

(内田魯庵「罪と罰」を読める最初の感銘——『新潮』第十七卷一号、明治四十五年七月)

不知庵は、『罪と罰』を読み始めてから「半月ばかり」は「面白くない」と感じ、読書もはかどらなかつたというのである。須走村に到着して間もないこの時、あるいは不知庵はすでに『罪と罰』を読み始めていたのかもしれないが、この時点で彼はまだ『罪と罰』によって「精神を掻きまはされる」ような読書経験をし、小説に対する認識を大きく転換させるまでには至っていないかつたと思われる。

なお美妙の手紙(書簡ア)には「八月二十日」の消印が捺されているが、この日に不知庵は、ふじや旅館にて巖谷小波の『妹背貝』(吉岡書籍店、同年同月)の評論を書いており、この時期の批評態度を知る上で参考になる。

ヒロイン艶子は脳病を憂ふるほどの学問好、殊更活潑にしては珍らしき謹慎にて十一二の年で水無雄を慰さめ十七の年にいろ／＼忠告する位の大事とりでありながら又親に向つて婚礼を否むほどの勇氣もありながら何事ぞ、水無雄の生死も分明ならずまだ／＼若い身で思切つた死に様、如何に活潑でも是ではチト活潑すぎる、(略)兎に角近來になき無難小説、是と指摘すべき傷少しもなし。旧硯友社連中の一方の大立物の貫目は確かに見へる、殊に趣向しある様でない様斬新な辺もあつて有がたし。

(不二山人「漣山人の「妹背貝」」『女学雑誌』第一七七号、明治二十二年八月三十一日)

末尾に「八月二十日富士山麓松林鬱葱たる処に書す」と記されたこの評論は、美妙からの書簡を受け取ったのとはほぼ同じ時点で執筆されたものである。『妹背貝』の登場人物のなかでも才気煥発な艶子が、水無雄の安否もよく確かめなまま、突飛に自殺してしまふ場面を「如何に活潑でも是ではチト活潑すぎる」と軽妙な皮肉を交えて批評している。作品の本質を見据えつつ、小説のなかの人物や状況の矛盾・不整合を軽妙に皮肉るといふこの批評態度は、「山田美妙大人の小説」で登場して以来、不知庵が行ってきたものと何ら異なるところがない。それから二日後の二十二日に、美妙に宛てて短い時間で小説の執筆を気軽に承諾している不知庵の姿にも、小説に対して「敬虔な信念」を抱いている様子は感じられないのである。以上の点から、この「もみぢ狩」と名付けられることとなる小説は、不知庵が「罪と罰」を読む前か、まだ読み始めた時期——すなわち「罪と罰」に「出会う」以前——に承諾され、執筆が始められたと一応は推定することができるだろう。その一方で、執筆期間および攔筆の時期については、未だ不明な点も多く現時点では確と定めることは難しい。

美妙が仲介した宮島鎗八の書簡には、執筆について「又両月に十枚位づ、御寄送被成下度よふ」とあり、不知庵も「十枚位ならば」と返事をしている。このことから、小説の執筆は「両月」つまり、二ヶ月にわたり二度に分けて原稿が送られたと推測することもできる。また、小説の掲載が明治二十三年の一月まで続いていることから、ドストエフスキーの『罪と罰』の読書体験を跨い

て執筆されたと考えることもできなくはない。あるいは、文学観の転機が訪れていたとしても、一度求めに応じた以上は書き続けたのかもしれない。しかし、これらはいくまで現時点で得られる限られた資料から導き出された憶測にすぎまい。

このように、「もみぢ狩」の執筆から攔筆までの期間と『罪と罰』の読書体験の前後関係を見定めることはきわめて難しい。では、「もみぢ狩」の作品そのものを見たときはどうであろうか。

三章でも見てきたように「もみぢ狩」は、これまで指摘されてきた不知庵の初期小説の特徴を見いだすことのできる小説である。その骨子は謡曲の「紅葉狩」に基づいているが、不知庵が利用したのは、鬼女が色気で男を誘惑し、最後は退治されてしまふという勧善懲悪譚の筋立てであった。このような趣向を生かした翻案の仕方を見る限りでは、たとえば不知庵が須走村での滞在を経た数ヶ月後に主張する、「小説は遊戯文字にあらず、字句美にして趣向奇なりとも、是ればかりにて小説なりといふべからず」という主張、さらには「所謂真理の発揮とは人情の極微を描写し得たるものにあらずや」（小説は遊戯文字にあらず）、「女学雜誌」一九三号、明治二十二年十二月二十五日」という小説に対する真摯な姿勢の微表を見いだすことはできない。『罪と罰』の衝撃的な読書体験の前に承諾、執筆され、その掲載が須走村での滞在の後までつづいた「もみぢ狩」という作品と、不知庵の文学観の転機となった読書体験との関わりについては、まだ不確定な要素も多々あり、今後も様々な議論が出てくることもあろうが、し

かし、この作品自体は、初期小説との結びつきがきわめて強い作品であると位置づけることができるのである。

注

- (1) 立命館大学所蔵の山田美妙関係資料については、青木稔弥「山田美妙関係手稿」のことなど」(『日本近代文学』第七十八集、二〇〇八・五)、中川成美「立命館大学所蔵山田美妙関係資料について」(日本近代文学館年誌「資料探索」第四号、二〇〇八・九)、福井辰彦「立命館大学所蔵山田美妙旧蔵書および美妙書入本『此ぬし』について」(『論究日本文学』第九十二号、二〇一〇・五)を参照されたい。
- (2) 初出はそれぞれ、「酒鬼」が『女学雑誌』(第一六一号〜一七一号、明治二十二年(一八八九)五月十一日〜七月二十日。断続八回)、「当世文学通」が『都の花』(第四卷第十七号、同年六月十六日)である。また、藤陰隠士「藤の一本」(『都の花』第五号〜二十三号、明治二十一年十二月〜二十二年九月)を不知庵の最初の小説とする先行研究もあった(片岡哲「内田魯庵における小説観」(『青山語文』第六号、一九七六・三)、歌田久彦編「年譜」(『内田魯庵集』明治文学全集24、筑摩書房、一九七八)が、野村喬編「内田魯庵著述年譜」(『内田魯庵全集』別巻、ゆまに書房、一九八七)以降訂正された。なお、藤陰隠士は藤

本藤陰の号である。

- (3) 往復書簡の翻刻・考証については、二〇一〇年七月三日、立命館明治文学研究会において、福井が発表した。小説「もみぢ狩」を発見し、二〇一一年二月二十七日、同研究会で「未紹介小説「もみぢ狩」論——紹介と研究の可能性」と題した発表を行ったのは大貫である。本稿はこれら二つの発表を元に執筆したものであるため、やや異例ながら、福井、大貫の共著の形を取った。

- (4) この読書体験に関して野村喬氏は「彼は丸善で購入してただちに読んだのではなかった。夏になって避暑旅行に行った富士山麓の旅館で、持参した何冊かの内の一つとして読んだ。その場所は静岡県駿東郡須走村ふじや旅館だった。「私の小説に対する考へは全く一変して了つた」と魯庵は追懐している」と指摘している(『内田魯庵全集』第十二巻「解説」(ゆまに書房、一九八四)五六九頁)。

- (5) 塩田良平「山田美妙研究」(人文書院、昭和十三年)伝記編 第三章全盛期、六十四頁。

- (6) 所蔵先の正式名称は「東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫」。請求記号はZ08・F6412。第一号の書誌を簡単に記す。表紙「婦人世界 THE LADY'S WORLD」令徳会雑誌部発行、墨書で「人見氏蔵」の書き入れあり。縦二十一・一cm×横十五・一cm、三十四頁。毎月一日刊。

(7) 列挙された賛同者は以下の通り。今立吐醉・今外三郎・徳永満之・大洲鉄然・棚橋一郎・中江篤介・中西牛郎・内田貢・陸実・小山正太郎・西村天囚・有賀長雄・赤松連城・渥美契縁・浅井忠・沢辺春水・沢辺保雄・桜井郁二郎・菊池熊太郎・宮崎道正・三宅米吉・志賀重昂・島地黙雷・杉浦重剛。

(8) 『反省会雑誌』第二十四号(明治二十二年十一月)に掲載された『婦人世界』第二号の目録を見ると、「室内談話の図」の画工として、井上芳洲の名が挙がっており、落款「芳洲」はこの人物を指すことがわかる。

(9) 野村喬『内田魯庵伝』「文壇登場と二つの邂逅」(リポート、一九九四)、三十八頁。

(10) なお、この冒頭は文化十年に出版された式亭三馬の滑稽本『人間万事虚誕計』初編の「雅人の虚」を模した表現である。

(11) 野村喬『内田魯庵全集』別巻「解説」(ゆまに書房、一九八七)、六五七頁。

(12) ただし、『国民之友』第四十八号(明治二十二年四月二十二日)掲載の「書目十種」という愛読書アンケートのなかで不知庵は、「徒然草、謡曲数種、近松門左衛門著作、京伝のしやればん、古文真宝、ツルゲーネフあひきき及めぐりあひ、Deserted Village, and Traveller Spectator (Addison), Johnson's Lives of the Poets, Dickens' Works.」を挙げ

ており、謡曲を愛読していたことがわかる。また不知庵が私淑していた親戚宮田直次郎を追悼した『牛岳遺事』(非売品、明治四十三年)では宮田牛岳が素人ではありながら熱心な宝生流の謡曲愛好者であったことが記されており、あるいは不知庵の謡曲の素養は宮田牛岳に与っている可能性もある。

(13) 「鉢木」のこの一節は、注(10)で指摘した『人間万事虚誕計』にも引用されているものであり、これを直接的な謡曲からの影響とみなすことには異議があるかもしれない。しかし、この部分がたとえ『人間万事虚誕計』から着想を得たものであったとしても、三馬の作品と謡曲の関係が薄いのには比べ、「もみち狩」の冒頭近くで美濃田風醒の謡う「鉢木」は、末尾で清見武文が謡う「紅葉狩」と対応し、この小説と謡曲の影響の結びつきを強調するものとなっている。

(14) 梗概は「紅葉狩」(野上豊一郎『解説・謡曲全集』第五巻、中央公論社、昭和十年、四八七頁)から引用した。

(15) 「不知庵主人 小説を書くとの噂あり 尤も以前にも二三種書きしことハありとか」(奥泰資「時事」◎飛花落葉)『延葛集』第十号(明治二十四年七月三十一日)掲載、『延葛集拾遺』所収。引用は『未刊・坪内逍遙資料集』六(逍遙協会、二〇〇三、一一)による。

(16) 野村喬『内田魯庵伝』「文壇登場と二つの邂逅」(リプ

ロポート、一九九四）、三十八頁。

(17) 柳田泉「小説『酒鬼』について」〔随筆明治文学〕、春秋社、昭和二年八月）、五四一頁。

*本稿中、引用にあたっては漢字、変体仮名は通行の字体に改め、原則としてルビ・傍点・圈点等は省略した。

*本稿の執筆に際し、書簡の閲覧および翻刻掲載については立命館大学図書館、雑誌の閲覧および図版の掲載については東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫の御高配を賜った。また、書簡翻刻にあたり、山本和明氏、池澤一郎氏、青田寿美氏から御教示を得た。記して感謝申し上げます。

(ふくい・たつひこ 上智大学准教授)

(おおぬき・としひこ 早稲田大学院生)